

## 第42回国際公文書館円卓会議 (CITRA) 参加報告

太田由紀・本村慈

国立公文書館

### 1. はじめに

2010年9月11日から17日まで、ノルウェー王国オスロ市において、第42回国際公文書館円卓会議 (International Conference of the Round Table on Archives, CITRA) が開催された。CITRA は、国際非営利機関である国際公文書館会議 (International Council on Archives, ICA) が主催し、A 会員 (国立/連邦公文書館) 及び B 会員 (専門職団体) のみが参加できる会合である。今年のテーマは「信頼とアクセス：デジタル時代における記録及びアーカイブズ管理の課題 (Trust and Access: Challenges to Managing Records and Archives in the Digital Age)」。

会場となったホルメンコーレン・パーク・ホテル・リカは、オスロ市内やフィヨルドを見渡す丘の上であり、ここに世界83カ国/地域から約270名のアーキビストが集合し、テーマについて議論し、交流を深めた。日本からは高山正也国立公文書館長、菊池光興前館長のほか職員3名と、全国歴史資料保存利用連絡協議会の佐々木和子理事が参加した。以下、期間中に開催された各種運営会合の様子もあわせて報告する。

### 2. 地域支部関係会合

国立公文書館は現在 ICA 東アジア地域支

太田 由紀 (おおた ゆき)

本村 慈 (もとむら めぐみ)

国立公文書館公文書専門員

部 (EASTICA) の議長国を務めているため、会期中、地域支部議長会合 (9月11日開催)、地域支部議長・セクション議長合同会合 (同日)、プログラムコミッション (PCOM) ・セクション・地域支部合同会合 (9月14日) の3つの会合への参加を求められた。これらは前回の CITRA (2009年11月マルタにて開催) から設定された、情報共有や意見交換を目的とした会合ではなく、各地域支部、各セクション、PCOM や国際アーカイブズ開発基金 (FIDA) との連携や相互の活用などが話し合われた。

#### 2.1 地域支部議長会合

9月11日午後に開催され、高山館長が EASTICA 議長として参加。セタレキ・タレ地域支部代表副会長が議事を進行した。活動が停滞している地域支部があるため、すべての地域支部が積極的に活動できるようにするにはどうすべきかが検討された。また、ICA から地域支部へ直接配当される補助金、FIDA から出される途上国向け補助金、PCOM が募集・選考するプログラム単位で授与される補助金の有効な活用の仕方も議論となった。

#### 2.2 地域支部議長・セクション議長合同会合

9月11日夕刻に、地域支部議長会合に引き続き開催された合同会合に、高山館長が EASTICA 議長として参加した。13の地域支部と13の専門職セクションの協力の可能性について議論された。地域支部の枠に縛られずセクションと結びついている活動例がいくつ

か紹介された他、国際アーカイブズデー（6月9日）に全地域支部、全セクションが必ず何か活動をするよう業務計画に組み込むこと等が提案された。

### 2.3 プログラムコミッション (PCOM) ・セクション・地域支部合同会合

9月14日午前中に開催され、高山館長が参加。ルイス・ベラード PCOM 担当副会長が議長を務めた。申請内容の質を維持するために、PCOM の補助金募集回数がこれまでの年2回から年1回へ変更されるという報告の他、著作権や ICA の知的所有権の問題など、ICA 全体に関わる問題が起きた際にどこが中心となって取り組むのか等について議論がなされた。

### 2.4 国際アーカイブズ開発基金 (FIDA) 理事会

9月11日午後には、FIDA<sup>1</sup> 理事会が開催され、菊池光興前館長が理事として出席した。2009年11月に FIDA の活動再開が決定されてから初めてとなる理事会が2010年3月にワシントン DC で開催され、5月に第1回目の補助金募集が開始された。7月の締切りまでに10件の申請があり、今回の理事会では検討の結果、必要書類の揃った申請のうち3件については上限を設けて補助金を支給することが決定した。

## 3. ICA 執行委員会 (EB)

9月12日には執行委員会 (Executive Board, EB) が行われ、高山館長が EASTICA 議長として出席した。執行委員会は、年次総会に次ぐ ICA の決議機関で、毎年1回以上開催することとされている会議である。年次総会にかけられる事項はすべて予め執行委員会で

<sup>1</sup> 国際アーカイブズ開発基金は、ICA 会員からの寄付金及び ICA から配分される資金によって運営される開発途上国向けの基金。2009年11月の執行委員会 (マルタ) において、財政危機のため休止していた FIDA の活動再開が決定した。

討議される。主な議題と決定事項は以下の通り。

### 3.1 分担金をめぐる議論

2010年6月の執行委員会 (韓国・ソウル) において、ICA の財政が現在 A 会員 (国立/連邦公文書館) の一部の国の分担金に頼りすぎている点を改善し、将来的には負担を公平にすべきであるという問題提起が首脳部から出されていた。今回は引き続き、実行に移すための3段階の分担金額変更の道筋が提案され、了承された。具体的には、初年度の2011年に A 会員の分担金負担額上位10ヶ国の分担金を10%削減、次いで2012年に負担額上位20ヶ国の分担金を削減し、代わりに C 会員 (地方公文書館) の負担額を増やす。地方公文書館については、負担額が増える代償として、これまで認められていなかった総会での投票権を付与する方針。3年目の2013年に会費以外からの収入源を探る他、新会員を募ることで会費増をめざす。新たな分担金額については、2011年の会合 (スペイン・トレドで開催) で明確になる見込みである。

### 3.2 世界記憶遺産をめぐる議論

世界記憶遺産 (Memory of the World, MOW)<sup>2</sup> に対して、これまで ICA は特定の記録を資料群から切り離して登録する方法に疑問を呈していた。しかし、今後は積極的に発言していく方針であるとして、2011年5月にワルシャワで開催される第4回世界記憶遺産会議 (Fourth International Memory of the World Conference) にも参加する。メンバーからは、世界記憶遺産に登録されることの宣伝効果についてもっと考慮すべきとの積極的な意見のほか、登録された記録が必ずしも文化遺産と呼べる重要なものではないので注意すべきとの指摘もなされた。

これらのほか、ICA の新しいロゴマーク

<sup>2</sup> 世界記憶遺産は、ユネスコが歴史的文書等の重要な記録遺産の保存のために1992年に創設した制度。

の紹介、フェロー選出に関する委員会新設の検討、パキスタンから洪水の被害状況の報告と支援の要請なども議題となった。

#### 4. CITRA セッション

CITRA セッションは「信頼とアクセス」のテーマのもと、9月15日・16日の2日間にわたって行われた。各セッションの講演要旨やパワーポイント等の資料は、一部だがCITRA2010のウェブサイトに掲載されている<sup>3</sup>。また、若手アーキビスト「フライング・レポーター」による参加報告もあるので参照いただきたい<sup>4</sup>。以下、傍聴した基調講演及びセッションの概要を記す。

##### 4.1 基調講演

途上国において、記録の作成と文書の管理が住民の権利獲得のためにいかに必要か、という観点からの発表が3つ行われた。

4.1.1 「アーカイブズのカとデジタルの未来 - 民主主義と人権へのサポート」 Randall Jimerson (米国/ 西ワシントン大学歴史学教授、アーカイブズ・記録管理学修士号プログラム責任者)

記憶は忘却されるが、記録は社会の抑圧された人に力を与える。アーカイブズは、アカウントビリティ、開かれた政府、社会的正義のために力を発揮する。すべての人を守るためのドキュメンテーションが必要である。抑圧の償いとしてアーカイブズを使うことができる。アーカイブズにより資産の復旧が可能となり、不正の記録を見ることで社会的正義の実行へとつながる。

4.1.2 「新しいグローバルチャレンジを克服

するための知的コミュニケーション」 Jan Egeland (ノルウェー/ノルウェー国際交流局長、前国連人道問題担当事務次長兼緊急支援調整官)

世界はよくなっているだろうか、悪くなっているだろうか。一世代前と比べ、死亡率が減るなどの改善面がある一方、社会不正は増大している。こうした中でアーカイブズによって、発言力のないコミュニティに光を当てることができる。誰が誰に対して何と言ったのか、ということ記録することに妥協してはならない。記録者 (recorder) は最前線にいる。アーカイブズは抑圧を予防し、不正に光を当てることができる。アーカイブズは警告システムとして機能する。世界は知らないふりはできず、政府は説明責任が求められる。アーカイブズは人々の苦しみをなくすことに役立つ。

4.1.3 「災害の際の信頼性の高い重要デジタル情報の蓄積と共有 - 赤十字の経験」 Sven Mollekleiv (ノルウェー/ノルウェー赤十字総裁、DNV (Det Norske Veritas 自主独立財団) CSR (企業の社会的責任) 局長)

赤十字は中立・信頼であると理解されることでミッションが達成できるため組織の透明性が重要である。紛争・被災地においては正しい情報を収集、管理、分析、提供し、他の団体の活動と重複しないよう、被災国で効率的なコーディネートをしなければならない。また、長期間の援助を行う際には、情報の長期保存も必要である。世界各地で行方不明者を探し、家族が再会できるよう手助けする活動もしているが、現実的な情報を集め、登録、照合しなければならない。イラク刑務所事件やクラスター爆弾の例で分かるように正確な情報が必要である。クラスター爆弾については、被害の大きさが明らかにされることで国際的な禁止条約が締結された。情報は知識ではないが、情報が知識を導く。情報の提供と分析に1ドルかけることは、人道援助に5ド

<sup>3</sup> CITRA2010

[http://www.citra2010oslo.no/prof\\_prog.html](http://www.citra2010oslo.no/prof_prog.html)

<sup>4</sup> フライング・レポーター (Flying Reporters) は、ICA の指導・監督のもとに活躍する若手アーキビストによる取材グループ。2008年のクアラルンプール大会で活動を開始し、今回のCITRA セッションでも各講演の様相を紹介している。

<http://flyingreporters.ica.org/oslo2010/>

ルかけるのに等しい。この意味でアーキビストの役割は重要である。

#### 4.2 全体セッション1：デジタル時代の記録の本質

##### 4.2.1 「デジタル記録を信頼できるか」 Ivar Fønnes (ノルウェー/ノルウェー国立公文書館長)

電子記録に「信頼性 (Trust)」を与えるための施策が必要であり、そのためには信頼できる電子記録の移管・電子収蔵庫を構築しなければならない。アーキビストの役割は、施策のリードをとっていくことである。ノルウェーでは2008年から4年かけて電子記録のオンライン移管事業に取り組む。第1段階の2008 - 2010には、デジタルアーカイブズ管理プロジェクトとして様々な要件を確定し、第2段階の2010 - 2011フォローアッププロジェクトで施行に入る。2012年にはすべての機関での導入が終わる。フレームワークができたからといって脆弱な電子記録のリスクを減らすことにはならないが、リスクを管理することはできる。

##### 4.2.2 「デジタル環境における近代化とドキュメンテーション」 Daniel J. Caron (カナダ/カナダ国立図書館公文書館長)

技術開発は止まることはなく、デジタル情報の出現は社会的変革を起した。デジタル時代の特徴は、アナログもデジタル化しなければならないこと、社会的規律を作るようになること、新世代の反応の仕方が柔軟に変化したこと、が挙げられる。特に新世代は、ベビーブーマー世代とは文字を読み書きする習慣が変化した。それは、アーキビストの仕事に変化を起し、意志決定もしなければならなくなった。

「ドキュメンタリー・モーメント (Documentary Moment)」とは、継ぎ目のない時間・空間のことで、非常に動的なもの。デジタル化時代の新たな要素である。例えば、従来30年かけて評価選別してきたが、現在は文

書の作成後すぐに判断しなければならなくなった。つまり、アーキビストは作成以前から関わらなくてはならなくなったということである。デジタル化のなかでの評価選別は、何が重要かを上流で決めなければならない。文書作成の最初から関わる、持続可能なものでなければならない。MLAの協力が必要である。

#### 4.3 分科会セッション1.1：新たなデジタルメディアの実践：電子メディアにおけるアクセス、ドキュメンテーション、個人情報保護

新たなデジタルメディアのメリット・デメリットについて、ジャーナリスト、図書館公文書館職員、データ監査局職員の3名がそれぞれの立場から報告した。司会は菊池前館長とジョージ・マッケンジー (George Mackenzie) スコットランド国立公文書館長が担当した。



分科会で司会をする菊池前館長 (左)

##### 4.3.1 「ネットワーク・コミュニケーションの課題」 Elin Stueland (ノルウェー/Aftenbladet 社ジャーナリスト)

ノルウェーにおけるソーシャルメディアの普及率は高く、特にノルウェーの2人に1人(約200万人)がアカウントを持つFacebookは多くの利用者の日常生活において重要な役割を担っている。何千もの読者を持つFacebook上のコメントや写真を、Aftenbladetはじめ他のメディアが引用し、社会的反響があることがあるが、利用者の中にはこうしたことを嫌がる者もいる。急速に普及しているソーシャルネットワーク上の発言は公的なも

のか否か。プライバシーの問題を踏まえたソーシャルメディアの利用ポリシーが問われている。

4.3.2 「フロントデスクからフェイスブックへ - アーカイブ機関において、ソーシャルメディアはその活動にいかなる影響を与えるか」 Lars Ilshammar (スウェーデン/労働運動図書館公文書館ディレクター)

アーカイブズ機関の所蔵資料へのアクセスの仕方が、情報通信技術 (ICT) の発達とソーシャルネットワークの急速な利用の広がりにより、変化している。新しい利用者は、オンラインで検索し、eメールで利用請求し、より多くのコレクションがデジタル化されウェブ上でアクセスできることを望んでいる。アーカイブズ機関にやってくるのは、スキャナーやデジタルカメラで撮影するための短時間であり、アーカイブズ機関は物理的な場所としてはそれほど重要ではなくなっている。ソーシャルネットワーク等により、より広い層に所蔵資料を公開し、新しい利用者に向かってサービスを提供する機関がある一方で、著作権や著作権がコントロールできなくなるのではという恐れがあるために、資料を公開する代わりに情報を閉じこめようという傾向もある。アーカイブズ機関は、新しいデジタルメディアを活用するために、コントロールを失うことを恐れず、自分たちが利用者にとってのガイドであり、パートナーであると認識すべきである。自分たちのコレクションは利用者のものですべきである。政府に情報政策改革を進めるようプレッシャーをかけるべきである。

4.3.3 「ソーシャルメディアにおけるプライバシー保護」 Ove Skåra (ノルウェー/ノルウェーデータ監査局情報課長)

現在プライバシーの保護には選択肢は0か1か、秘密か公開か、しかない。インターネット上に一度載せてしまった情報は、永くネット上にとどまり、不利益を招く恐れがある。

よって個人情報の露出について個人は責任を持つべきである。同時にプライバシー情報をインターネット上で公開する公的部門は、それによって引き起こされる不利益を想定し、個人情報公開を控えるような道を選ぶべきであろう。例えばノルウェーでは、透明性の確保という大義名分のもと、全納税者の納税額がネット上で閲覧できるが、それによって犯罪も誘発される。公的部門が、個人に不利益な情報を掲載した場合、情報の「削除」により個人を救済するということもありえる。

"Zero Privacy, get over it" としてプライバシー保護に立ち向かうべきである。

質疑応答ではアーキビストの視点から、インターネット上における本人の望まない個人情報の「削除」についてインテグリティ (完全性) と「削除」の関係性についての質問があった。ジャーナリストの Stueland 氏は、個人からの削除希望を受けてしまったら記事が成り立たなくなるとして削除には反対の立場を示した。Skåra 氏は歴史的に重要でないものは削除可と述べ、参考文献として

Delete: The Virtue of Forgetting in the Digital Age<sup>5</sup> を挙げた。Ilshammar 氏は例として教区記録を取り上げ、個人記録は現在に近づけば近づくほど取扱いが難しいことを述べた。菊池前館長と共にセッションの司会を担当したマッケンジー氏は、「アーキビストは破棄するときに最も創造的 (creative) になる」と述べ、情報過多の現在の記録の保存と廃棄の意思決定の重要性を指摘した。

4.4 全体セッション2：実践的な視点と経験

4.4.1 「最前線の実践への最先端理論の適用：InterPARES の経験」 Luciana Duranti (カナダ/ブリティッシュコロンビア大学図書館学・アーカイブズ学・情報学部教授)

<sup>5</sup> Delete: The Virtue of Forgetting in the Digital Age, 著者 Viktor Mayer-Schonberger, 発行 Princeton University Press, 2009年

記録管理は、環境・組織文化によって異なるため、民族誌学的アプローチ (Ethnographic Approach) をとる必要がある。ただこうした組織文化の違いを InterPARES に反映させるべきかどうか、課題。組織文化あるいはコスト面によってリスクのない程度に変化があるべきである。

4.4.2 「デジタルアーカイビングのチャンスと課題 - 2010年第8回デジタルアーカイビング欧州会議からのフィードバック」 Andreas Kellerhals (スイス/連邦公文書館館長)

デジタルアーカイビング欧州会議は意見を出すための会議であり、結論を出すための会議ではない。ビジネスや利害関係者との協力が必要。現在は良好な e-future を創り上げる時期である。また、e-archive はアーキビスト全員に係ることもある。情報化社会を透明なものにするにはまだ時間がかかる。

4.5 分科会セッション2.3：建築とデジタルアーカイブ

建築アーカイブズは建築家の著作権・建物のセキュリティの観点から、アクセスが限られていることがあり、異なる作成母体が関わっているため、多くのフォンドやシリーズがある。アーカイブズではなく、図書館や博物館で保存されることもある等の導入が司会からあった後、3人のスピーカーが発表を行った。

4.5.1 「建築とデジタルアーカイブ - 主な課題と本質的な問題点」 David Peycere (フランス/パリ建築遺産博物館、DI 欧州アーカイブプログラム GAU リーダー (2002-2008))

1990年代以降 PC を使って設計をするようになり、昔は無理だった新しい造形が可能になった。電子データはデータの保存から記録管理、長期保存へと重要性が変わっている。記述においては、プロジェクト名、プロジェクトの段階、書類、透写紙、図面等の保存の標準化が図られている。

4.5.2 「FACADE プロジェクト - 建築 3D 模型の保存とアクセス」 Thomas Rosko (米

国/MIT 機関アーカイブ長)

現在マサチューセッツ工科大学 (MIT) で進行中の CAD 保存プロジェクト FAÇADE Project<sup>6</sup> は、建築の設計で使われるさまざまな種類の CAD を長期保存するために、ファイルの調和等を行うプロジェクトである。MIT は三次元のデータ保存のためのオープンソース Dspace<sup>7</sup> と SIMIT<sup>8</sup> を使い、建築データを保存している。

4.5.3 「建築とデジタルアーカイブ - デザインの記録：アレクサンドリア図書館からノルウェーオペラハウスまで」 Tarald Lundevall (ノルウェー/Snøhetta AS 社代表、パートナー)

2008年に竣工されたオスロ市内の国立オペラハウスを建築したスノヘッタ社の代表。このオスロオペラハウスの設計段階、コンペ、プレゼンテーション、施工段階で、どのような種類の設計図・ビジュアル資料が必要だったかを語った。

4.6 セッション：PARBICA 良き統治のためのレコードキーピングツールキット：発展途上国の政府が記録を正しく作成し、保存できるように支援する

ロス・ギブス (Ross Gibbs) オーストラリア国立公文書館長、セタレキ・タレ (Setareki Tale) フィジー国立公文書館長・PARBICA 議長、クリスティン・マルティネス (Christine Martinez) ICA 副事務局長が、PARBICA (太平洋地域支部) で開発したツールキットの紹介のプレゼンテーションを行った。2005年の PARBICA において記録管理の低さが認識されたことから開発が始まったツールキットの強調すべき点は、政府の利益・コミュニケーションを守るために有効であることである。当ツールキットは

<sup>6</sup> FAÇADE Project <http://facade.mit.edu/>

<sup>7</sup> Dspace <http://www.dspace.org/>

<sup>8</sup> SIMIT <http://simile.mit.edu/>

PARBICA 内で利用され、成功を収めた。現在、国連開発計画（UNDP）は途上国において記録管理の重要性を広めているところであるが、ツールキットの今後の有効活用が期待されている。これまで英語版しかなかったが、PCOM の資金援助を得て、フランス語圏である西アフリカのブルキナファソにおいて試験的に導入され、今回はその報告もなされた。今後 ICA ではフランス語・スペイン語翻訳を進め、アフリカ・南米でも事業を推進する予定である。

#### 4.7 全体セッション3：デジタル記録が伝統的なアプローチに問いかける課題

##### 4.7.1 「デジタル時代のプロヴィナンス (provenance) 再考」 Terry Cook (カナダ/マニトバ大学教授)

プロヴィナンスには多くの定義があるが、重要なことは「コンテキスト」という考えと関連していることである。これまで、プロヴィナンスは作成者と関係があり、アーカイブズ群（フォンド）は行政組織によって作成され、コンテキストはアーカイブズ業務の要である、とこれまで考えられてきた。しかし、デジタル時代、プロヴィナンスは今までとは違うように考える必要がある。現在、記録作成行為は変わり、人々はいくつものメディアを使い、ダイナミックに相互介入し、意思決定をこれまでと違うように行っている。記録は新しい組織文化の中で作成されている。情報はひとつの組織ではなく、様々な作成者によって作成される。新たなコンテキストにおいて作成されているということが今日のプロヴィナンスである。ひとりの作成者という考えは不適切であり、記述では複数の作成者を挙げなくてはならない。

##### 4.7.2 「マクロアーカイブズ学とメタ情報のコンテキスト」 Maria Luisa Conde Villaverde (スペイン/検察庁)

社会が変化し、「知る権利」のように情報の透明性に対する要求が高まり、アーカイブ

ズは必要な人に必要な情報を与えるサービス提供者になってきた。広範囲な記録収集も求められている。今後はマクロアーカイブズ学に力を入れるべき。1つの組織を考えるのではなく、国の組織でどのような基準が使用されているのかを考える必要がある。アーカイブ・プロフィールは、将来にわたって見やすくなければならない。また、利用者がどのようなパターンの検索を行うのかなど、利用者のニーズから考えるべき。利用者は中心的な構成要素である。

#### 4.8 分科会セッション3.1：民間企業、デジタル記録、アーカイブズ管理、説明責任

今回唯一のビジネス・アーカイブに関するセッションであった。ブランドス新 ICA 会長が司会を行った。

##### 4.8.1 「統一的なコンテンツ管理 - グローバル企業アーカイブズにおける現物とデジタル記録の管理」 Becky Haglund Tousey (米国/シカゴクラフト社アーカイブズ部長、企業労働セクション事務局メンバー)

クラフトフーズ社は170カ国に展開し、14万人の社員を抱える食品会社である。アーカイブズに関するポイントの1つ目は、情報資産を責任をもって扱うことである。歴史的なものだけでなく、顧客との関係を示すものも扱う。2つ目は、アーカイブズ活動である。記録は評価選別し、全体の5%程度を残している。レファレンスとリサーチは、ユーザーと社員の両方へ情報提供するために行っている。3つ目は、ビジネス活動。マーケティング、法律部門（商標登録などを含む）、改革などに活用している。

収蔵庫は数カ国に分散し、デジタル収蔵庫は3つある。「統合的なアーカイブズコンテンツ管理 (Integrated Archives Content Management)」により、異なる言語であっても共通のインターフェイスを使用し、社員なら誰でもアクセス可能である。効率的な管理によって社員は情報を探す手間が省け、よ

り戦略的に活動できるという利点がある。

4.8.2 「Google - 公共・民間の利益に資する世界規模の社会メディアとしての将来的な役割」 Jan Gronbech (ノルウェー/グーグル・ノルウェー国内責任者)

グーグル社の活動紹介が中心の報告であった。質疑応答では、グーグルのインデックスはアーカイブズとして残すのかとの質問に対し、「インデックスしたものを長期保存する訳ではない。現在は提供できないが、それに向けた活動はしている。しかし無料なので、コストの問題がある」との回答があった。

4.8.3 「すべての記録はどこへ行ってしまったのか? ウェブサイト収集の課題とチャンス」 Philip Mooney (米国/コカ・コーラ社遺産広報部長)

コカ・コーラ社では、ウェブページの保存について挑戦中である。1995年にできた最初のHPはもはやトップページしか現存せず、ウェブ上で消費者とどのようにコミュニケーションしてきたのか分からなくなっているという問題がある。英国の企業に依頼してナビゲーションツールを開発し、4半期毎にキャプチャーを実施することにした。同社には約500のブランド商品があり、200カ国で営業し、国ごとにサイトを設けているが、主要国(英・日・中・南アなど)の主力ブランドのウェブの収集を目指している。2010年現在、HTMLページ110万ページ、340万イメージを収集しているが、実施開始から6カ月目なのでまだ実験中といえる。質疑応答ではサイトの一般公開の有無について質問があった。ムーニー氏からは、ビジネスリソースとしての社内用アーカイブのため一般公開はしていない、CMに登場するタレントの著作権問題も絡むので難しいとの回答があった。

4.9 分科会セッション5: 国立公文書館長リフレクションアワー: 世界の力、デジタルの力

高山正也国立公文書館長、楊冬権 (Yang

Dongquan) 中国国家档案局長、ウラジミール・タラゾフ (Vladimir Tarazov) ロシア連邦公文書館副館長、デイビッド・フェリエロ (David Ferriero) アメリカ合衆国アーキビスト、ダニエル・キャロン (Daniel J. Caron) カナダ国立図書館公文書館長、オリバー・モーレイ (Oliver Morley) 英国国立公文書館長代理ら5人のパネリストによるセッションで、司会はイアン・ウィルソン氏が担当した。当初予定されていた南アフリカ国立公文書館館長は欠席であった。高山館長は「デジタル化で明日を拓く国立公文書館」と題し、国立公文書館及びアジア歴史資料センターのデジタルアーカイブに関する発表を行った(全文はpp.49に掲載)。ロシアでは、2011年までに電子政府となるべく法律を整備中、デジタルアーカイブについては研修も不可欠と報告した。アメリカでは、ソーシャルメディアの利用により一般からのアクセスが増加しているとのこと。カナダからは、コンテンツのデジタル化について開始後5年までは無料、以降は有料化の計画があるとの報告があった。また、デジタル化によって人々の「ものを書く習慣」や「読書習慣」には大きな変化が起きているので、考え直さなければならないとの意見が出された。

質疑応答では、テリー・クック氏から「21世紀のアーキビストとしてどんな人物を雇いたいのか」という興味深い質問が投げかけられた。フェリエロ館長からは「テクノロジーや情報の扱い方、社会科学への理解が必要であり、様々な能力のミックスが必要」との回答があった。一方で、モーレイ館長代理からは「歴史的なアーキビストで尊敬心を持つ人物が欲しい」、タラゾフ副館長からは「今も紙媒体の記録があるので、知識・技術があり訓練を受けた伝統的なアーキビストが欲しい」という答えと合わせて「最近では、デジタル化をアーキビストの仕事として強調しすぎる傾向があるのではないかと」の指摘がなされた。

## 5. 年次総会 (AGM)

9月17日の年次総会 (Annual General Meeting, AGM) では、東南アジア地域支部 (SARBICA) ・太平洋地域支部 (PARBICA) の新憲章、文学アーカイブズセクション (SLA) の再開、地方自治体文書館セクション (SMA) の憲章変更及び地方自治体・地域文書館セクション (Section of Local, Municipal and Territorial Archives, SMLT) への名称変更、2009年度会計監査報告等が承認された。前回マルタで見送られた「世界アーカイブズ宣言 (Universal Declaration on Archives)<sup>9</sup>」も満場一致で採択された。今後は、ユネスコの正式な宣言として公表される予定である。

総会において最も時間を割いたのは分担金についての議論である。会員の負担のバランスの見直しである。現在の負担上位国の分担金を減額した場合に、それを補える保証はあるのか、という点に質問が集中した。執行委員会内で議論が進んでしまっていたことに対して不信感を抱いた参加者もいたようだった。ただ、提案は了承され、2011年から段階的に進められることが確認された。

このほか、今回の年次総会から正式に就任したマーティン・ブランデス (Martin Berendes) 新 ICA 会長による挨拶も行われた。また、2012年のブリスベン大会公式ウェブサイト<sup>10</sup>の紹介、2011年 CITRA (スペイン・トレドで開催) のプロモーションビデオの上映があった。しかしながら、2013年以降の開

<sup>9</sup> 「世界アーカイブズ宣言」の全文及び詳細については ICA ウェブサイトを参照。

<http://new.ica.org/1055/news-events/the-universal-declaration-on-archives-adopted-by-the-annual-general-meeting-in-oslo.html>

日本語訳は、国際資料研究所発行の「DJI レポート」No.82・83合併号に掲載されている。

<http://www.djichiyoko.com/>

<sup>10</sup> ICA 2012 congress

<http://www.ica2012.com/Home.aspx>

催については CITRA の在り方の見直し等の理由により保留となっている。

最後に、イアン・ウィルソン氏 (カナダ国立図書館公文書館館長、前 ICA 会長) と Olafur Asgeirsson 氏 (アイスランド国立公文書館館長、前 PCOM 担当) が ICA フェローに選出された。

## 6. ノルウェー国立公文書館視察

9月17日の午後、ノルウェー国立公文書館の視察が設けられた。同館はオスロ市街地より約7km離れた山の中腹に設置されている。入口のある建物は2005年の建築で、1階には受付と小さな展示室、2階にはカウンター、自然光を取り入れた明るく広い閲覧室、カフェテリアがある。資料目録には冊子とパソコンとがあるが、カード目録も設置されていた。閲覧室には撮影台も完備され、来館者は資料を自由に撮影できる。



岩山に設けられた収蔵庫

収蔵庫は岩山を削り抜いた洞窟の中に設けられ、核シェルター構造となっており大変ユニークなものであった。現在も拡張工事中だが、現行の計画終了後は電子文書のみに移管

<sup>11</sup> Noark は、ノルウェーの記録管理標準。1984年に刊行された初版は、世界で最も早く作成された標準のひとつである。Noark5の詳細についてはノルウェー国立公文書館ウェブサイト参照。

<http://www.arkivverket.no/arkivverket/Offentlig-forvaltning/Noark/Noark-5/English-version>

となるため書庫の拡張は行わないようである。保存環境は温度18~20、湿度40~45%程度。1970年代に建てられた収蔵庫は固定式書架が、最新の収蔵庫では移動式書架が採用されている。収蔵庫内の所々に作業スペースが設けられ、便利そうであった。また、書架やブックトラックの明るい色彩も北欧デザインらしく印象的であった。

同館におけるデジタルアーカイブ及び「Noark5<sup>11</sup>」についても説明があった。

## 7. おわりに

新会長に就任したブランドス・オランダ国立公文書館長は、負担金は正にも見られるように、新しいアイデアを次々と出していく。ICAの運営は今後劇的に変わっていくだろう。デジタルの時代だからこそ、対面のコミュニケーションの重要性も感じた会合であった。

2年後のプリズベン大会のプロモーションが本格的にスタートした。日本を含めたアジア地域からの参加・協力も期待されている。関係機関の方々の協力をお願いしたい。

### CITRA セッションプログラム (仮訳)

| 9月14日 (火) |   |  |  |
|-----------|---|--|--|
| 1430 1500 | 【開会セッション】<br>Ivar Fønnes ノルウェー国立公文書館長, Nolda Römer-Kenepa CITRA 担当副会長   |  |  |
| 1500 1520 | 【基調講演 1】 Randall Jimerson /米国/ 西ワシントン大学歴史学教授, アーカイブズ・記録管理学修士号プログラム責任者「アーカイブズの力とデジタルの未来 - 民主主義と人権へのサポート」   |  |  |
| 1520 1540 | 【基調講演 2】 Jan Egeland/ノルウェー/ノルウェー国際交流局長, 前国連人道問題担当事務次長兼緊急支援調整官「新しいグローバルチャレンジを克服するための知的コミュニケーション」   |  |  |
| 1540 1600 | 【基調講演 3】 Sven Mollekleiv/ノルウェー/ノルウェー赤十字総裁, DNV (Det Norske Veritas 自主独立財団) CSR (企業の社会的責任) 局長「災害の際の信頼性の高い重要デジタル情報の蓄積と共有 - 赤十字の経験」  |  |  |
| 9月15日 (水) |   |  |  |
| 0900 1000 | 【全体セッション 1 : デジタル時代の記録の本質】<br>1a. Ivar Fønnes/ ノルウェー/国立公文書館長「デジタル記録を信頼できるか。デジタル記録管理のための信頼ある枠組構築におけるアーキビストの役割」<br>1b. Daniel J. Caron/カナダ/ カナダ国立図書館公文書館長「デジタル環境における近代化とドキュメンテーション」 |  |  |
| 1030 1035 | 【1.1新たなデジタルメディアの実践：電子メディアにおけるアクセス、ドキュメンテーション、個人情報保護】<br>司会：菊池光興/日本/国立公文書館/前館長   | 【1.2信頼できるデジタル記録の管理】<br>司会：David Leich/フランス/ICA 事務局長          | 【1.3デジタル時代の市民権】<br>司会：Jussi Nuorteva/フィンランド/国立公文書館館長     |
| 1035 1055 | Elin Stueland/ノルウェー/ノルウェー紙 Aftenbladet.no オンラインニュースマネージャー「ネットワーク・コミュニケーションの課題」  | Trond Sirevåg/ノルウェー/ノルウェー国立公文書館プロジェクト・ディレクター「信頼できるデジタル保存庫計画」 | Maria Paz Vergara/ チリ/連帯司祭記録アーカイブ財団事務総長「デジタル記録と人権」       |
| 1100 1120 | Lars Ilshammar/スウェーデン/労働運動図書館公文書館ディレクター「フロントデスクからフェイスブックへ。アーカイブズ機関において、ソーシャルメディアはその活動にいかなる影響を与えるか」  | Young-hwan Park/韓国/国家記録院アーカイブ情報部副部長「デジタル保存庫における信頼構築の事例」      | Abdelmajid Chikhi/アルジェリア/国立公文書館館長「持ち去られたアーカイブズ - 国際的な課題」 |

|           |  |   |  |
|-----------|--|---|--|
| 1125 1145 | Ove Skåra/ノルウェー/ノルウェーデータ監査局情報課長「ソーシャルメディアにおけるプライバシー保護 - 公共部門の責任とは」   | Trond Sirevåg/ ノルウェー/国立公文書館プロジェクト長「ライフサイクルを通じた信頼できる記録管理の事例」   | Nomusa Zimu/南アフリカ/人間科学研究評議会 (HSRC), プレトリア「説明責任、良好なガバナンス、人権保護のための記録管理」                            |
| 1330 1430 | 【全体セッション2：実践的な視点と経験】<br>2a.Luciana Duranti/カナダ/ブリティッシュコロンビア大学図書館学・アーカイブズ学・情報学部教授「最前線の実践への最先端理論の適用：InterPARES の経験」<br>2b.Andreas Kellerhals/スイス/連邦公文書館館長「デジタルアーカイビングのチャンスと課題 - 2010年第8回デジタルアーカイビング欧州会議からのフィードバック」 |   |  |
| 1500 1505 | 【2.1InterPARES - 事例と総合研究】<br>司会：Luciana Duranti/カナダ/ブリティッシュコロンビア大学図書館学・アーカイブズ学・情報学部教授  | 【2.2デジタルアーカイブズ - シンプルかつ堅固に】<br>司会：Juliane Mikoletzky/オーストリア/ウィーン技術大学アーカイブズ長, ICA 大学アーカイブセクション (SUV) 委員長                               | 【2.3建築とデジタルアーカイブ】<br>司会：Joao Vieira/ポルトガル/住宅都市再生機構情報図書館アーカイブ局局长, ICA 建築記録セクション (SAR) 委員長         |
| 1505 1525 | Glenn Dingwall/カナダ/バンクーバー市デジタルアーキビスト「デジタルの横糸：InterPARES の成果とバンクーバー市デジタル記録に共通の脅威」   | Raivo Ruusalepp/エストニア/エストニアビジネスアーカイブズ, コンサルタント「保存しやすいデジタル資料：デジタル保存業務の自動化支援のためのツール」  | David Peycere/フランス/パリ建築遺産博物館, DI 欧州アーカイブプログラム GAU リーダー (2002 2008)「建築とデジタルアーカイブ - 主な課題と本質的な問題点」  |
| 1530 1550 | Mariella Guercio/イタリア/イタリアチーム共同責任者, ウルビーノ大学教授「信頼に関すること全て：Eメール記録の適切な管理と長期保存のためのポリシー, ガイドライン, 勧告の実践」   | Jon Garde/ 英国/IT ジャーナル経営パートナー, DLM フォーラム事務局長, MoReq 2010著者「欧州記録管理標準 MoReq2010 - 記録管理の要件モジュール 簡単かつ複雑なシステムとセクター要件に向けた ERMS 定義のための革新的構造」 | Thomas Rosko/米国/MIT 機関アーカイブ長「FACADE プロジェクト - 建築 3D 模型の保存とアクセス」                                   |
| 1555 1615 | Eun Park/韓国チーム代表/マクギル大学情報学大学院准教授「CeDA 認証済 eドキュメントオーソリティ - 信頼できる第三者機関による収集施設・認証オーソリティ」  | Anne Mette Dørum/ ノルウェー/国立公文書館副館長「ノルウェー記録標準 Noark 5 - MoReq の適用は可能か」  | Tarald Lundevall/ノルウェー/Snøhetta AS 社代表, パートナー「建築とデジタルアーカイブ - デザインの記録：アレクサンドリア図書館からノルウェーオペラハウスまで」 |
| 1630 1730 | PARBICA 良き統治のためのレコードキーピングツールキット：発展途上国の政府が記録を正しく作成し, 保存できるよう支援する<br>Ross Gibbs/オーストラリア/国立公文書館長<br>Setareki Tale/フィジー/フィジー国立公文書館長<br>Hamidou Diallo/ブルキナファソ/ブルキナファソ国立公文書館長<br>Christine Martinez/フランス/ICA 副事務局長    |   |  |
| 9月16日 (木) |  |   |  |
| 0900 1000 | 【全体セッション3：デジタル記録が伝統的なアプローチに問いかける課題】<br>3a. Terry Cook/カナダ/マニトバ大学教授「デジタル時代のプロヴィナンス再考」<br>3b. Maria Luisa Conde Villaverde/スペイン/検察庁「マクロアーカイブズ学とメタ情報のコンテキスト」  |   |  |

|           |  |  |  |
|-----------|--|--|--|
| 1100 1105 | [3.1民間企業、デジタル記録、アーカイブズ管理、説明責任]<br>司会：Martin Berendse/オランダ/国立公文書館長  | [3.2はじめよう (Part A) 電子 (デジタル) 記録管理の初期アプローチ]<br>司会：Anne Thurston/英国/OBE, 国際記録管理トラスト (IRMT) ディレクター  | [3.3デジタルプラクティスとアーカイブズポータル]<br>司会：Angelika Menne Haritz/ドイツ/連邦公文書館副館長, APEnet 科学コーディネーター  |
| 1105 1125 | Becky Haglund Tousey/米国/シカゴクラフト社アーカイブズ部長, 企業労働セクション (SBL) 事務局メンバー<br>「統一的なコンテンツ管理：あるグローバル企業アーカイブズにおける現物記録とデジタル記録の管理」   | James Lowry/ケニア/IRMT コンサルタント「東アフリカにおける電子政府及び情報公開とレコードマネジメントの提携」                                  | Ole Myhre Hansen/ノルウェー/ASTA 取締役/「デジタル化されたアーカイブ資料の出版のための国レベルのチャンネル」   |
| 1130 1150 | Jan Grønbech/ノルウェー/グーグル・ノルウェー国内責任者「Google - 公共・民間の利益に資する世界規模の社会メディアとしての将来的な役割」   | Majiid Sultan Al Mehairi/アラブ首長国連邦/アブダビドキュメンテーションリサーチセンター (NCDR) サポートサービス副局長「NCDR のデジタルアーカイブ成功物語」 | Jill Cousins/オランダ/Europeana (欧州文化遺産のマルチメディア図書館) ディレクター「Europeana とデジタルアーカイブ管理のアプローチ」   |
| 1155 1215 | Philip Mooney/米国/コカ・コーラ社遺産広報部長「すべての記録はどこへ行ってしまったのか。ウェブサイト収集の課題とチャンス」   | Olav Sataaslåtten/ノルウェー/ノルウェー国立公文書館アシスタント・ディレクター「良いガバナンス, 説明責任, 司法へのよりよいアクセスの促進」                 | Peder Andren/スウェーデン/国立公文書館, APE ネット普及啓発リーダー「デジタルアーカイブ管理に関する欧州アーカイブズポータル (APEnet) のアプローチ」   |
| 1330 1600 | 【セッション4 現在進められているプロジェクト】<br>ワークショップ：ICA 記憶へのアクセスプロジェクト (ICA AtoM) とアーカイブマティカ (Archivematica)<br>George McKenzie/スコットランド/国立公文書館館長<br>Peter Van Garderen/オランダ/Artefactual Systems 社<br><br>ワークショップ：ICA 記録管理標準 (ICA Req)<br>Janet Foster/英国/ TASK 代表<br><br>ワークショップ III: はじめよう (Part B) 電子 (デジタル) 記録管理の初期アプローチ<br>Sharon Alexander Gooding/バルバドス/西インド大学キャンパス記録マネージャー, カリブ地域支部副議長<br>マスタークラス：デジタル記録法医学プロジェクト<br>Luciana Duranti/カナダ/プリティッシュコロンビア大学図書館学・アーカイブズ学・情報学部教授<br>Adam Jansen/カナダ/プリティッシュコロンビア大学図書館学・アーカイブズ学・情報学部博士課程学生 |  | 【セッション5 パネルプレゼンテーション 国立公文書館長リフレクションアワー - 世界の力、デジタルの力】<br>モデレーター：Ian Wilson, ICA 会長/カナダ<br>中国国家档案局長；Yang Dongquan,<br>ロシア連邦公文書館副館長；Vladimir Tarazov,<br>国立公文書館長；高山正也<br>アメリカ合衆国アーキビスト；David Ferriero,<br>カナダ国立図書館公文書館長；Daniel J. Caron,<br>南アフリカ国立公文書館長；Graham Dominy,<br>英国国立公文書館長代理；Oliver Morley |
| 1600 1630 | 【全体セッション6 まとめ】<br>Nolda Romer Kenepa CITRA 担当副会長   |  |  |